北海道新聞 28年12月25日（朝刊）

写真で比べる小樽の今と昔

博物館で企画展

【小樽】街並みの変化を写真で比較する企画展「路地裏の貌（かお）　1970年代と2016年の小樽」が、小樽市手宮1の市総合博物館本館で開かれている。

70年代に小樽の路地裏を撮影した写真家、故兵庫勝人さんの作品30点と、小樽商科大の学生が今年5月から約半年間、兵庫さんの作品と同じ構図で撮影した写真19点を展示。70年代当時にあった民家が取り壊されて空き地になっている姿や、路地があった場所がすし店になっている様子などが一目で分かる。

石川直章館長は「小樽に暮らしている人も知らない地元の姿と、それに迫ろうとする商大生の作品を見に来てほしい」と話している。入館料は一般300円、高校生と市内の70歳以上150円。中学生以下無料。来年3月26日までの午前9時半～午後5時（29日～1月3日と火曜日は休館）。

（長峯亮）

70年代と現在の小樽の姿を比べることができる企画展

小樽ジャーナル 28年12月24日

70年代の街並み「路地裏の貌」 博物館企画展 (2016/12/24)

ツイート

小樽市総合博物館企画展「路地裏の貌(かお) 1970年代と2016年の小樽」が、12月23日(金)から同館本館(手宮1)で始まった。

同展は、札幌市出身で小樽北照高校を卒業した写真家・兵庫勝人(かつんど)氏(1942～2004)が、1970年代に小樽の街角を撮影した兵庫コレクションを基に、当時撮影された場所が現在どのようになっているのかを、小樽商科大学の学生が2016(平成28)年春から調査した成果を、1970年代当時の市街図や社会状況などを解説した図表などを用いながら展示している。

初日の23日は13:00から、同館石川直章館長によるギャラリートークが行われ、「博物館が所蔵する自慢の品が2つあって、1つは明治から大正にかけて小樽の街や人々の生活の様子を細かく記した稲垣益穂日誌で、もう1つがこの兵庫コレクション」と紹介。

「同コレクションは、1975(昭和50)年から1979(昭和54)年までに撮影された、約4,200枚の写真を整理したアルバム50冊と1万枚以上のネガ類。路地裏など普通の人が写真に残さないような場所が撮影されており、通常であれば記録に残らない風景であることに価値が非常に高い。

1970年代は、運河論争真最中であり、小樽市が観光のまちづくりに本格的に取り組み始める直前の時代であるが、1970年代の小樽の街を輪切りにしたような写真を、現在改めて目にすると、変っていないと思っていた街並みが、実は随分変わってしまっていることが良く分かる」と話した。

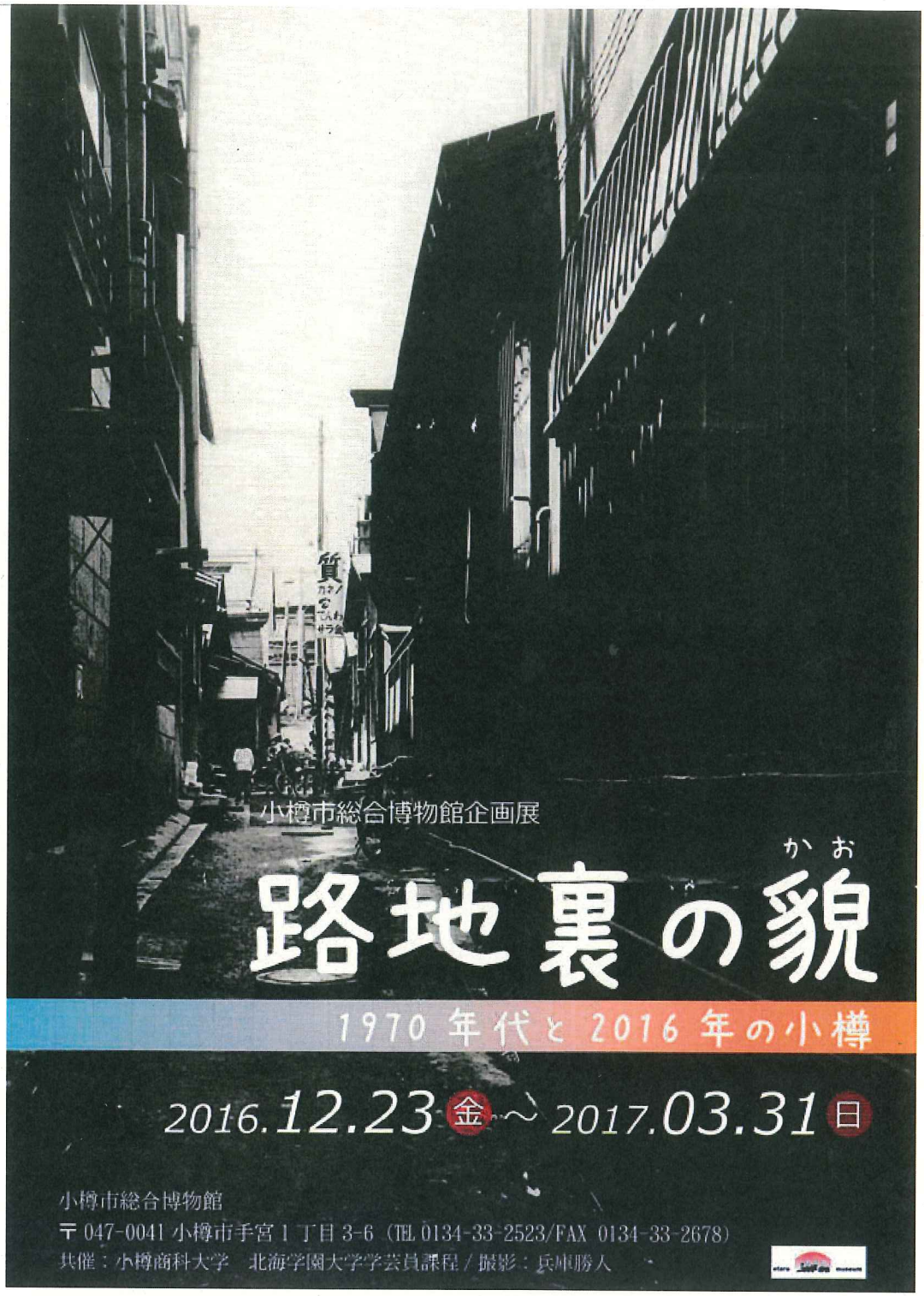
また、「兵庫氏によって残された1970年代の小樽の街の姿が、現在どうなっているのか改めて写真に記録することが、これから30～40年後のための記録になる」と、今回の企画の意義を強調した。

2016年に学生が調査した写真の枚数は1,125枚で、そのうち474枚が特定されたが、調査対象となる写真は全体で5,000枚あり、今年の調査では全体の9.5%が特定されたことになる。

「学生にとって、兵庫氏が残した小樽の風景は、特に市外出身者にとっては、初めて見る世界であることから、場所の特定に苦慮したが、特定には、マンホールの位置が実は大変役に立った」と語られると、参加者から感心する声が聞かれた。

同展は2017(平成29)年3月31日(日)まで。◎小樽市総合博物館HP

小樽ジャーナル 28年12月24日



北海道新聞 28年12月23日（朝刊）

「産業支援し 雇用確保を」

人口対策会議

本年度の第2回小樽市人口対策会議（座長・鈴木将史小樽商大副学長）が22日、市役所で開かれ、委員から、子育て支援や雇用を確保する施策の充実などを求める意見が相次いだ。

会議には鈴木副学長のほか、小樽商工会議所や子育て支援団体関係者、公募で選ばれた市民ら12委員が出席した。市は4月、30代を中心とする若手職員で「市みらい創造プロジェクトチーム」を組織し、11月に地場産業振興などを含む地方創生に向けて事業案を立案。今回の会議では、この内容について説明した。

一方、委員からは「子育て支援を（全て1カ所で受けられる）ワンストップで行ってほしい」と提言があったほか、市内で事業所数の減少が続いているため「雇用確保に向け、新規創業や事業承継など地場産業の支援が重要だ」との意見が上がった。（中野訓）

観光都市小樽へ！　観光基本計画提言書 (2016/12/21)

ツイート

小樽市基本計画策定委員会・李濟民委員長(小樽商科大学教授)は、市の観光振興の基本的な方針を定める「第2次小樽市観光基本計画」策定のための提言書を、12月21日(水)10:00から、市役所(花園2)2階市長室で、森井秀明市長へ手渡された。

この提言書を基に、小樽市は、第2次小樽市観光基本計画を策定し、2017(平成29)年度から2026(平成38)年度までの10年間、小樽市が持続可能な観光都市として更に発展し、観光が市にとって重要な基幹産業であることを、市民が共通の認識を持ち、共に観光まちづくりを推進する。

2006年(平成18)年、第1次小樽市観光基本計画策定から10年が経ち、観光を取り巻く環境は変化し、持続可能な観光都市に発展するためには、新しい指針の策定が求められた。

平成28年4月28日に、19名の委員へ委嘱状を交付し、12月まで8回の委員会を実施した。議論を重ね、観光施策を一層推進するため、第2次小樽市観光基本計画に関する提言書をまとめた。計画の期間は、2017(平成29)年度から2026(平成38)年度までの10年間。

提言書(A4サイズ・30ページ)には、小樽をはじめ国内・道内での観光の現状、小樽観光の課題や目指すべき姿、方向性や主要施策を盛り込んだ。

小樽観光の課題は依然として改善されず、新たな切り口での観光資源を探すことが必要であるとし、目指すべき姿としては、本物の小樽と触れ合うために、観光客と市民が触れ合う中で、新しい発見があり、また訪れたいと思う町になるために、埋もれている小樽の魅力を引き出し磨き上げ、観光客には観るだけではなく体験してもらうためにも、市民も参加する必要がある。

観光都市として成長発展するために、市民の主体的参加なくしては成り立たず、市民が観光に積極的に向き合う取り組みを充実させ、小樽の観光のポテンシャルを引き出す。

小樽観光の方向性のポイント・小樽の魅力を深め広げる・情報を共有するの3つから、具体的に進めるための主要施策をまとめた。

小樽の魅力を深めるために、歴史・文化・芸術体験のプログラムを構築し、滞在型観光に向けたプランを充実させ、埠頭、運河の拠点整備と新たな誘致活動を推進させるなど提言書にまとめた。

市長は、「私自身の思いの方向性と合致し、それをより大きく推進していただける提言書と心強く感じている。今後、具体的な計画を作り、皆さんには、実現のために力添えをお願いする」と述べた。

李委員長は、「8回の委員会の中で、小樽の観光の課題や問題を網羅し、それに対して対策を盛り込んだ印象。具体的な施策も、どこからどう手をつけるか提案書には盛り込めなかったので、どう進めるのかしっかり見届ける作業がある」と話した。

10月1日(土)に、ワークショップ「小樽の観光について考えよう」を実施し、市民が小樽の観光について日頃思っていることなどを話し合い、意見を聞いた。